

高大接続入試における入試成績と学業成績の相関

大久保 貢 (福井大学)

高校時代の探究学習の成果を評価する高大接続入試に関して入試成績と入学後の学業成績に着目し、両者の間の相関関係および学年進行に伴いどのように変動するかを分析した。高大接続入試は入試成績と入学後1年間および3年間の学業成績との相関では正の相関の可能性を有すること、1年から3年への学年進行に伴う相関の推移は変化が少ない可能性を有することなどの知見が得られた。高大接続改革の折、高校時代に探究力を身に付けた新しい入学層が増加することが予想される。これらの入学層を評価する高大接続入試は現在の入試改革の有効な参考事例として意義のある入学者選抜と考える。

キーワード：高大接続入試, 追跡調査, 入試成績, 総合成績, 相関, 選抜効果

1 はじめに

高大接続改革の折、現在の高校教育で探究的な学びへの変革として課題研究の実践を行っている。そして、この実践により培った探究力（問題解決能力、論理的思考力、創造性、知的好奇心、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力など）を身に付け、これまでの生徒と違った新しい生徒を育成している。これらの生徒は大学側にとってこれまでとは異なった新しい入学層であり、これらの入学層を評価する入学者選抜の検討が求められている。

このような観点から筆者らはこれまでに探究力を多面的に評価するルーブリックを開発（大久保, 2018）し、それを用いて学部アドミッションポリシーに沿った高大接続入試を設計し2017年度入試に初めて導入した。またこの新しい入試により入学した学生の学業成績や意識調査を報告した（大久保ほか, 2021）。上述のように入学者選抜方法による入学後の学業成績の追跡調査は他大学でも報告されている（池田, 2009; 西丸, 2010; 吉田ほか, 2024）。しかし、高校時代の探究学習を評価する高大接続入試の入試成績と入学後の学業成績との相関および学年進行に伴う相関の推移に関する報告について公表されている文献は筆者が知る限り見当たらない。

本稿では福井大学国際地域学部に2017年度入試から導入した高大接続入試の入試成績と入学後の学業成績との関係性の分析を行い、得られた知見をまとめる。

2 国際地域学部の入試別の募集人員と入学者数の推移

2017年に創設された国際地域学部の入試は、総合型選抜Ⅰ高大接続入試（以下、高大接続入試）、学校推薦型選抜Ⅱ、一般選抜（前期日程、後期日程）である。入試別の募集人員と入学者数の推移を表1、表2に示した。

表1 入試別の募集人員の推移

入試年度	2017～2018	2019～2020	2021～
高大接続入試	若干名	5	8
学校推薦型Ⅱ	10	10	10
前期日程	35	32	30
後期日程	15	13	12

表2 入試別の入学者数の推移

入試年度	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
高大接続入試	3	3	5	4	8	8	8	8
学校推薦型Ⅱ	10	10	10	10	10	10	10	10
前期日程	36	36	33	31	34	30	30	32
後期日程	12	16	12	14	11	11	13	8

3 分析対象とするデータ

3.1 入試の成績データ

対象とする入試は高大接続入試、学校推薦型選抜Ⅱ、一般選抜（前期日程）（以下、前期日程）である。一般選抜（後期日程）は合格者のうち3割から4割が入学を辞退するため本稿の調査対象から外した。

高大接続入試は大学入学共通テストを課さず、第1次選考（書類審査）と最終選考（プレゼンテーションおよび面接）を課して配点は公表していない。大学入学共通テストの受験が必須となっている区分は学校推薦型選抜Ⅱと前期日程である。学校推薦型選抜Ⅱの大学入学共通テストの配点は6教科8科目または7教科8科目450点満点、前期日程は6教科8科目または7教科8科目900点満点である。一方、個別学力検査に関して学校推薦型選抜Ⅱは面接で450点満点、前期日程は2科目600点満点である。なお、本稿で扱う入試成績はそれぞれの入試区分の成績をそのまま用いた。

3.2 入学後の成績評価基準と学業成績

国際地域学部の入学後の成績は表3に示すように13段階による国際的な評価基準で成績を評価している。追跡調査研究において入試成績と入学後の学業成績との関係を検討する際に、大学入学後の学生の成績評価としてGPA (Grade Point Average) を用いている大学が多い (文部科学省, 2023)。しかし、GPAでは履修登録科目が少ない場合も高い数値になるため、本稿では総合成績を用いた。この学部の総合成績は総

表3 13段階による成績評価基準

評価(評語)	GP	評価基準	評価点
A+	4.00	目標を完全に達成し、傑出した水準に達している。	100点～98点
A	4.00	目標をほぼ完全に達成し、きわめて優秀な成果をあげている。	97点～95点
A-	3.67	目標をほぼ完全に達成し、優秀な成果をあげている。	94点～90点
B+	3.33	目標を十分に達成しており、優秀な部分も多くみられる。	89点～87点
B	3.00	目標を十分に達成している。	86点～83点
B-	2.67	目標を十分に達成しているが、一部について改善の余地がある。	82点～80点
C+	2.33	目標を概ね達成し、優秀な部分もみられる。	79点～77点
C	2.00	目標を概ね達成している。	76点～73点
C-	1.67	目標を概ね達成しているが、一部さらなる学修を必要とする部分も残る。	72点～70点
D+	1.33	最低限の目標は達成しており、中には優秀な部分もみられる。	69点～67点
D	1.00	最低限の目標は達成している。	66点～63点
D-	0.67	最低限の目標は達成しているが、一部さらなる学修を必要とする部分も残る。	62点～60点
F	0	目標を達成していない。	59点～0点

合成績 = (A+) の単位数 $\times 4 +$ (A) の単位数 $\times 4 +$ (A-) の単位数 $\times 3.67 +$ (B+) の単位数 $\times 3.33 +$ (B) の単位数 $\times 3 +$ (B-) の単位数 $\times 2.67 +$ (C+) の単位数 $\times 2.33 +$ (C) の単位数 $\times 2 +$ (C-) の単位数 $\times 1.67 +$ (D+) の単位数 $\times 1.33 +$ (D) の単位数 $\times 1 +$ (D-) の単位数 $\times 0.67$ により計算される。

4 結果

4.1 入試成績と入学後1年間の学業成績の相関

国際地域学部の高大接続入試、学校推薦型選抜Ⅱ、前期日程の入試成績と入学後1年間の学業成績に関する相関の結果を表4に、またその散布図を図1～図20に示した。高大接続入試(2017年度入学生～2024年度入学生)を図1～図8に、学校推薦型選抜Ⅱ(2019年度入学生～2024年度入学生)を図9～図14に、前期日程(2019年度入学生～2024年度入学生)を図15～図20に示した。

なお、入試成績と学業成績の相関をもって入試の妥当性を検討する場合、入試成績は全受験者の値が存在するものの、学業成績は入学者のものしか存在しないため、相関係数が低下する「選抜効果」が知られている(南風原, 2002)。ただし、学業成績を入試成績に回帰する回帰直線が選抜を行うか否かで変化しないことを仮定できれば選抜を行わなかった場合の相関係数を推定する「範囲制限の修正公式」が知られている(芝・南風原, 1990)。本稿ではこの公式を用いて相関係数を算出した。

入試成績と入学後1年間の学業成績の相関について、高大接続入試は2017年度から調査した8年間のうち、6年で正の相関を有していることが分かった。しかしながら、入学者数が最小3名、最大8名でサンプル数が少ないため継続した調査が必要と考える。一方、学校推薦型選抜Ⅱでは調査した6年間のうち、2023年度のみ正の相関であることが分かった。この入試においても入学者数が最大で10名でサンプル数が少ないため、今後の調査が必要と考える。また前期日程では6年間のうち4年で正の相関が認められた。

表4 入試成績と入学後1年間の学業成績の相関

入試年度	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
高大接続入試	-0.93	0.39	0.72	0.27	0.60	0.25	-0.49	0.47
学校推薦型Ⅱ	—	—	-0.26	-0.64	-0.50	-0.49	0.65	0.03
前期日程	—	—	0.43	0.24	0.35	0.08	0.41	-0.06

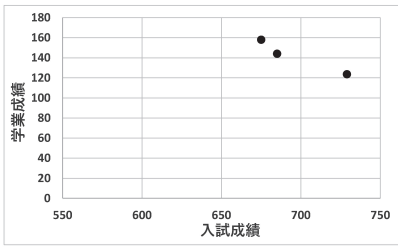


図 1 高大接続入試 (2017 年入学生)

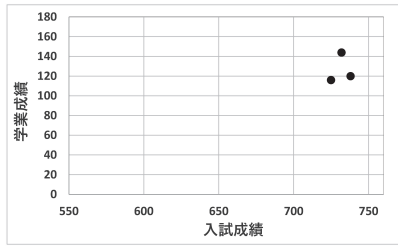


図 2 高大接続入試 (2018 年入学生)

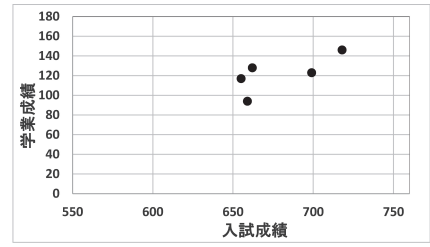


図 3 高大接続入試 (2019 年入学生)

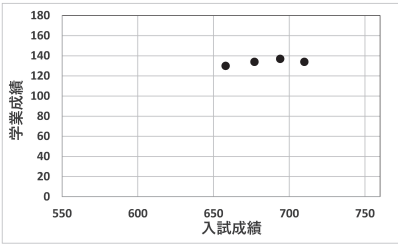


図 4 高大接続入試 (2020 年入学生)

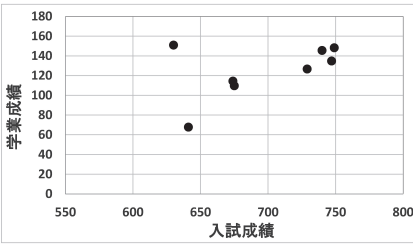


図 5 高大接続入試 (2021 年入学生)

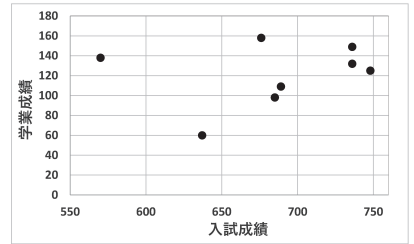


図 6 高大接続入試 (2022 年入学生)

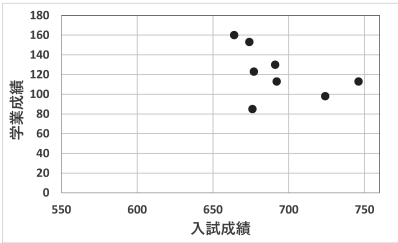


図 7 高大接続入試 (2023 年入学生)

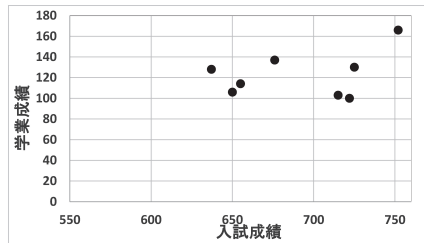


図 8 高大接続入試 (2024 年入学生)

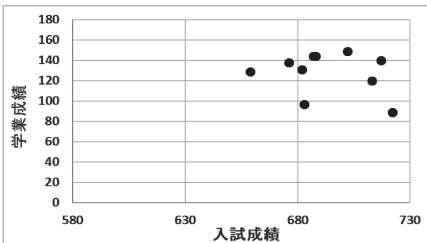


図 9 学校推薦Ⅱ (2019 年入学生)

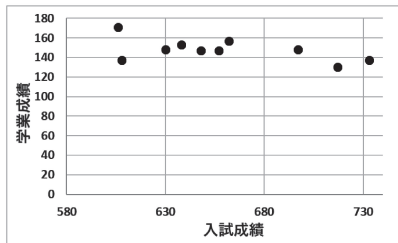


図 10 学校推薦Ⅱ (2020 年入学生)

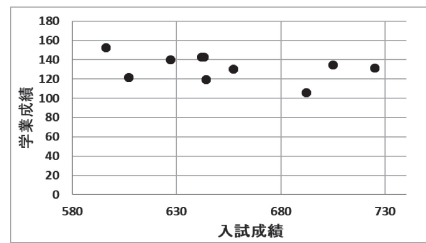


図 11 学校推薦Ⅱ (2021 年入学生)

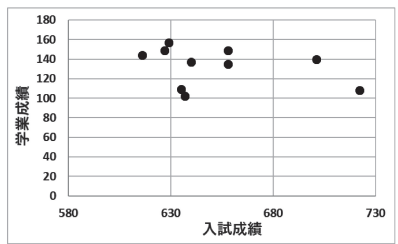


図 12 学校推薦Ⅱ (2022 年入学生)

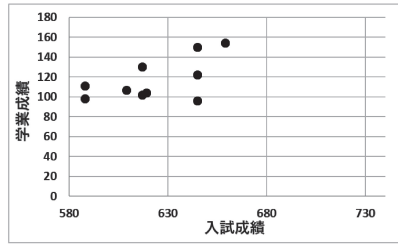


図 13 学校推薦Ⅱ (2023 年入学生)

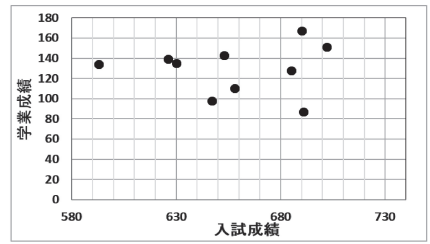


図 14 学校推薦Ⅱ (2024 年入学生)

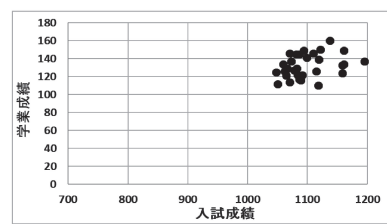


図 15 前期日程 (2019 年入学生)

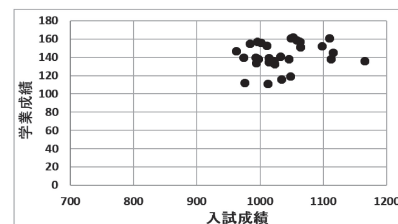


図 16 前期日程 (2020 年入学生)

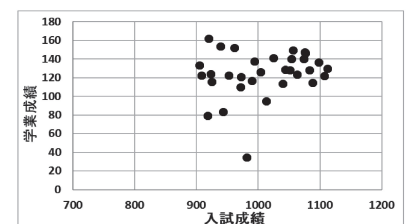


図 17 前期日程 (2021 年入学生)

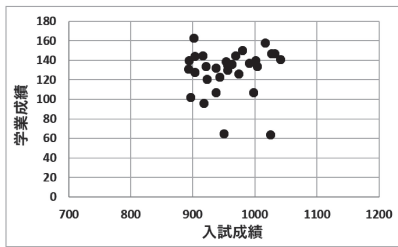


図 18 前期日程 (2022 年入学生)

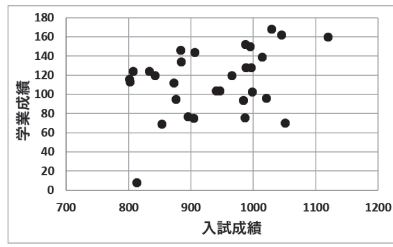


図 19 前期日程 (2023 年入学生)

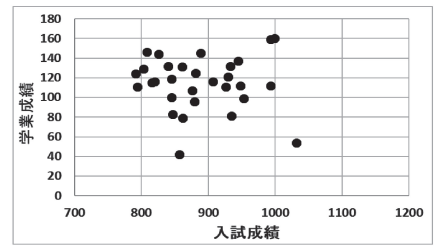


図 20 前期日程 (2024 年入学生)

4.2 入試成績と入学後 3 年間の学業成績の相関

入試成績と入学後 3 年間の学業成績に関する相関の結果を表 5 に、その散布図を図 21～図 32 に示した。高大接続入試を図 21～図 24 に、学校推薦型選抜 II を図 25～図 28 に、前期日程を図 29～図 32 に示した。

高大接続入試における相関は、2019 年度、2021 年度、2022 年度の 3 年において正の相関を有することが分かった。しかしながら、上述のとおり入学者のサンプル数が少ないため更なる調査が必要と考える。一

方、学校推薦型選抜 II における相関は 4 年間すべて負の相関であった。また前期日程における相関は 2019 年度だけ正の相関を示すことが分かった。

表 5 入試成績と入学後 3 年間の学業成績の相関

入試年度	2019	2020	2021	2022
高大接続入試	0.77	- 0.94	0.67	0.28
学校推薦型 II	- 0.36	- 0.63	- 0.52	- 0.47
前期日程	0.41	- 0.05	0.09	- 0.28

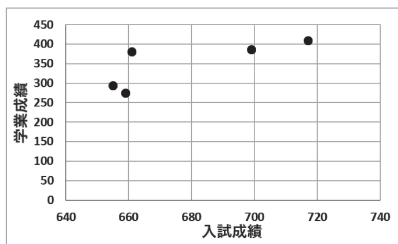


図 21 高大接続入試 (2019 年入学生)

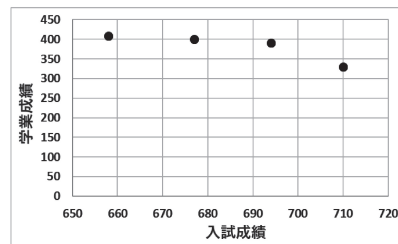


図 22 高大接続入試 (2020 年入学生)

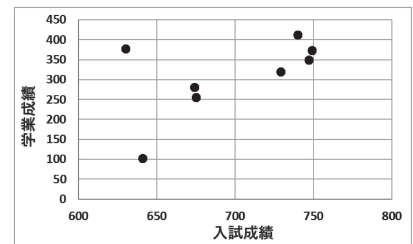


図 23 高大接続入試 (2021 年入学生)

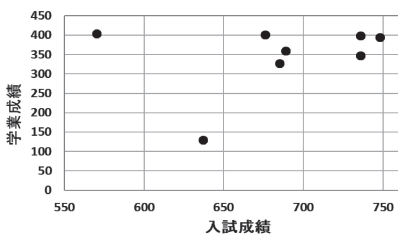


図 24 高大接続入試 (2022 年入学生)

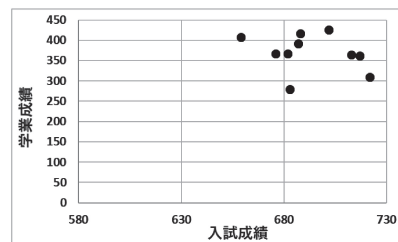


図 25 学校推薦 II (2019 年入学生)

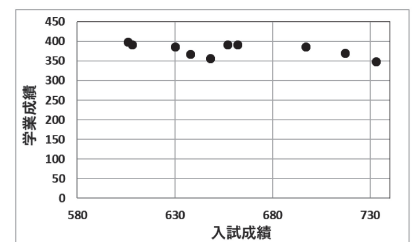


図 26 学校推薦 II (2020 年入学生)

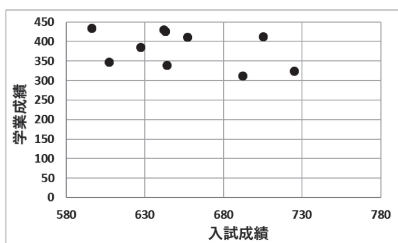


図 27 学校推薦 II (2021 年入学生)

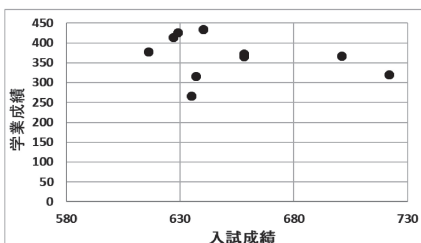


図 28 学校推薦 II (2022 年入学生)

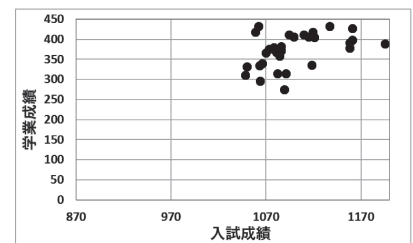


図 29 前期日程 (2019 年入学生)

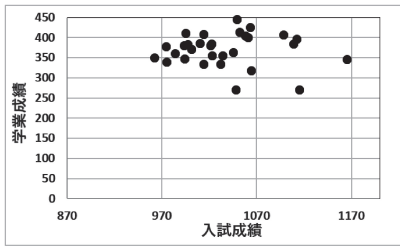


図 30 前期日程 (2020 年入学生)

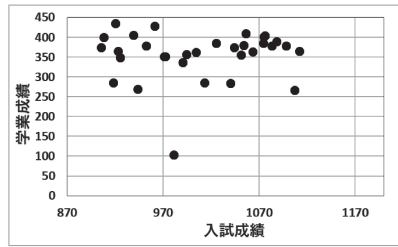


図 31 前期日程 (2021 年入学生)

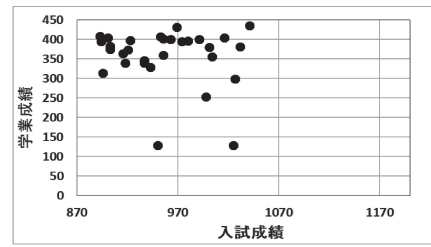


図 32 前期日程 (2022 年入学生)

4.3 学年進行に伴う入試成績と入学後の学業成績の 相関の推移

2019 年度入学生, 2020 年度入学生, 2021 年度入学生, 2022 年度入学生を対象に, 表 4, 表 5 およびその散布図 (図 21 ~ 図 32) から入試成績と入学後の学業成績の相関が学年進行に伴いどのように変動するかを調査した。これらの結果から学年進行に伴う高大接続入試の入試成績と入学後の学業成績の相関は 2019 年度, 2021 年度, 2022 年度の 3 年を見ると, 相関に変化が少ないことが分かった。また学校推薦型選抜Ⅱも相関に変化が少ないことが分かった。上述のとおりこれらの入試はサンプル数が少ないため, 今後の継続した調査が必要と考える。

一方, 前期日程の相関は学年進行に伴い減少傾向であることが分かった。入試成績と学業成績との相関は, 一般に, 選抜効果により弱くなることが知られている (例えば, 木村, 2007)。また, 桜井ほか (2025) によると, 学年進行に伴い入試成績と学業成績との相関が減少傾向であることを報告している。本分析の前期日程の結果はこの報告と同様な傾向を示した。

5 考察

高大接続入試の入試成績と入学後の学業成績の相関関係を分析した結果, 正の相関の可能性を有すること, 学年進行に伴う相関の推移は変化の少ない可能性を有することなどが明らかになった。これらの要因は下記に示した 3 点の取り組みの成果によるものと考えられる。

- ① 高校における探究的な学びへの支援。
- ② 高校での探究的な学びの実践で培った多様な学習成果を多面的に評価する高大接続入試の導入。
- ③ 高校時代に培った探究力が大学入学後の「課題探求プロジェクト」に活かされたこと。この 3 点について説明する。

5.1 高校における探究的な学びへの支援

2019 年から本学アドミッションセンターが窓口となって高校の探究的な学びへの支援を行った。各高校からの探究的な学びに関する依頼事項と実施例を表 6

に示した。

表 6 高校からの課題研究の依頼事項と実施例

依頼事項	実施例
課題研究に関する講話	・ 課題研究について講演した。 ・ SDGs の課題研究について講演した。
課題研究のテーマの設定について	・ 課題研究のテーマ設定の発表会で助言や講評を実施した。
課題研究に関する生徒の質問に対するコンサルテーション	・ 英語の上達方法について教えて欲しい。 ・ 地域の活性化に関して教えて欲しい。 ・ 駅前の町づくりについて教えて欲しい。 など, 年間 30 件以上の依頼を受け大学の専門家が丁寧に対応した。
課題研究の論文の書き方	・ 論文の書き方に関する講話を行った。
課題研究の中間発表及び成果発表会に対する講評	・ 課題研究の中間発表に対する助言および講評を行った。 ・ 課題研究の最終成果発表会に対する助言および講評を行った。

高校における探究的な学びの取り組みとして各高校では課題研究を実践している。しかし, これまで課題研究の指導経験のない高校教員にとってテーマ設定や課題に対する解決方法などが分からないため, 多くの依頼が大学に寄せられた。依頼された事に対してすべて丁寧に対応した。例えば課題研究で分からない点に関して高校生自らが大学に来て大学教員に質問したり, またはその課題に関する実験を行い課題研究の問題解決を図った。このように各高校は課題研究を試行錯誤しながら実践した。

なお, 大学教員が高校に出向いて課題研究に関する支援を行った回数は, 2022 年度は 95 回, 2023 年度は 112 回, 2024 年度は 97 回であった。以上のように, 本学では高校での探究的な学びへの支援を積極的に行っている。

5.2 高大接続入試の導入

国際地域学部の入学者に対する入試設計は, 表 7

のような4つの区分で行われている。表中の○印は該当の検査を課すことを、X印は該当の検査を課さないことを、△印は学力検査とは異なる筆記試験等を課すことを、それぞれ表す。

表7 入試区分と学力検査等の実施状況

	センター試験 (共通テスト)	個別学 力検査	面接	プレゼン テーション
高大接続入試	X	X	○	○
学校推薦型選抜Ⅱ	○	X	○	X
前期日程	○	○	X	X
後期日程	○	△	○	X

入試成績と入学後の学業成績の相関について、国際地域学部の4つの入試区分のうち、高大接続入試、学校推薦型選抜Ⅱ、前期日程の3つの入試区分について調査した。表7から分かるように、高大接続入試の選抜方法が他の3つの入試の選抜方法と異なっている点は大学入学共通テストを課さず、プレゼンテーションを課すことである。特に、高大接続入試のプレゼンテーションは高校時代の探究的な学びの実践で培った多様な学習成果をルーブリックにより多面的に評価している。この多様な学習成果としては、主体性、課題に対する問題解決力、創造性、コミュニケーション能力、協働性などを挙げられ、それらを信頼性および妥当性を有するルーブリック¹⁾により評価を行った。また、面接においては高校時代の取り組みなどを評価した。以上のように、高大接続入試では高校時代の探究的な学びに対するプレゼンテーションおよび面接により、国際・地域社会の諸課題に取り組む意欲・適性等を評価するようにデザインした(大久保ほか, 2021)。

この高大接続入試に志願した生徒の中には、高校で

の探究学習を実践した生徒や高校での探究学習の実践だけでなく、土曜日、日曜日にNPO法人主催の探究学習を学校の垣根を超えて他の高校の生徒と一緒に実践した生徒も見受けられた。

5.3 入学後の学修プロセスとその成果

入学後の国際地域学部の学び²⁾の特色は、次の3点を身に付けることである。① 社会の様々な課題を知り、考え、行動する力。② 課題を分析し、深く理解するための理系的素養。③ 異文化を理解しようとする意志。図33で示したようにこの学部の学修のプロセスは入学後1年次後期から「課題探求プロジェクト(基礎)」の科目で自治体や企業に出向いてそれを大学に持ち帰り学生達で議論して解決を図り、その成果を2月に自治体や企業の関係者を招いて報告する取り組みを行っている。このサイクルを2年次では「課題探求プロジェクトⅠ」および「課題探求プロジェクトⅡ」の科目で1サイクルを行い、3年次では「課題探求プロジェクトⅢ」の科目で1サイクルを行い、4年次に卒業研究で1サイクルを行う。以上のように、この学部では4年間に4サイクルの課題探求プロジェクトを実践する。従って、高校時代の探究的な学びの経験が入学後の課題探求プロジェクト活動に有効に繋がっている。

高大接続入試入学生の入学後のパフォーマンスに関して地元の新聞に取り上げられた事例を下記に紹介する。

○ 地元のカフェを地域の集いの場にしようと、学生がメッセージカードで温かい交流を企画した。来店者に人の温かさや優しさを感じて欲しいと考案

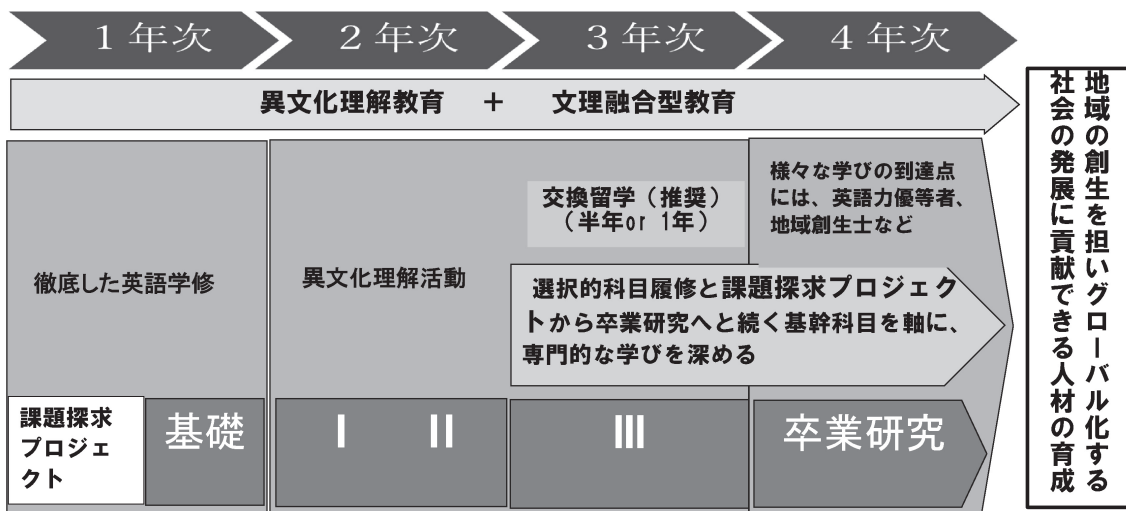


図33 国際地域学部の学びのプロセス

した。

- 学生が若い顧客層の取り組みが課題になっている地元企業と連携し、学内で2日間限定のショップを設置した。幅広い年齢層の人が立ち止まり手応えを感じた。
- 過疎地域活性化活動の一環として、学生が集落ににぎわいを生み出すきっかけにしたいと集落のシャッターに壁画を描いた。学生は集落がにぎわってほしいと集落を彩る絵に期待を寄せている。

以上のように、高校時代に培った探究力が大学入学後の「課題探求プロジェクト」に活かされ有益な成果を挙げている。

6 まとめ

高校時代に探究力を身に付けた新しい入学層を評価する高大接続入試において、入試成績と入学後の学業成績との相関関係を分析した結果、正の相関の可能性を有すること、学年進行に伴う相関の推移は変化の少ない可能性を有することなどの知見が得られた。この要因は高校時代に培った探究力が大学入学後の「課題探求プロジェクト」に活かされたと考える。即ち、高校時代の探究学習の経験が大学での学生の成長に大いに影響を及ぼした。

高大接続改革の折、今後、これらの入学層が増加することが予想される。現在の入試改革において高大接続入試は有効な参考事例として意義のある入学者選抜と考える。

注

- 1) **高大接続入試の多面的評価手法**：高校生の学びの深まりを把握するために、ルーブリックによる評価、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価の多様な評価方法がある。しかし、一般的には入学者選抜に関するこれらの評価方法の知見や方法の蓄積が十分でない状況である。また入学者選抜での多面的な評価方法の説明責任を確保するためには、アドミッションポリシーに基づく多面的な評価の信頼性・妥当性に着目すべきである。そのためには、高校関係者とも協力して具体例を蓄積し共有するとともに評価基準・方法の信頼性・妥当性を検証した評価手法を用いなければならない。
- 2) **国際地域学部の学び**：4年間を通して実践する「課題探求プロジェクト」は企業や自治体に向いて様々な課題を知り、調査し、課題解決の一端を担う実践的な科目である。この実践的な学びと課題を理解し、分析する幅広い専門分野の学習を有機的に結びつける形でカリキュラムを構成している。このプロジェクトは学

生の希望に沿って1年次から3年次にかけて、学年進行に伴い到達目標を高度化させる形で実施し、最終的には自分の参加したプロジェクトに触発したテーマについて、専門的な専門分野に即して調査・研究し、卒業研究に繋げる。また実践的なプロジェクト学習を継続的に深めながら、それと関わる専門教科の知識と方法を習得する「課題探求プロジェクト」と専門教育科目の結びつきをしている。

謝辞

2名の査読者には原稿を注意深くお読みいただき、建設的なコメントをいただきました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 大久保貢・森幹男・中切正人 (2018). 「『探究力』に対するルーブリック評価の開発」『大学入試研究ジャーナル』 **28**, 53-59.
- 大久保貢・中切正人 (2021). 「高大接続改革における入学者選抜—新しい入学層を評価する高大接続入試—」『大学入試研究ジャーナル』 **31**, 196-201.
- 池田文人 (2009). 「入試区分による入学後の学業成績の優劣の検証」『大学入試研究ジャーナル』 **19**, 95-99.
- 西丸良一 (2010). 「入学者選抜方法による大学の学業成績—同志社大学社会学部を事例に—」『同志社大学教育開発センター年報』 (1), 16-25.
- 吉田裕輝・園部英貴・服部辰広 (2024). 「高校の評定平均値と入学試験の成績および入学後の中間試験結果の関連性—柔道整復師養成の専門学校入学者を対象とした調査—」『日本体育大学紀要』 **53**, 1033-1041.
- 文部科学省 (2023). 「大学における教育内容等の改革状況について (令和3年度)」文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1341433.htm (2025年4月24日).
- 南風原朝和 (2002). 『心理統計学の基礎：統合的理解のために』有斐閣.
- 芝祐順・南風原朝和 (1990). 『行動科学における統計解析法』東京大学出版会.
- 木村拓也 (2007). 「大学入学者選抜と「総合的かつ多面的な評価」—46 答申で示された科学的根拠の再検討—」『教育社会学研究』 **80**, 165-186.
- 桜井裕仁・林篤裕・山村滋・牧野直道 (2025). 「学年進行に伴う入試成績と学業成績の相関の推移」『大学入試研究ジャーナル』 **35**, 201-208.